

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03321

研究課題名（和文）アルコール依存症者の「回復の物語」をその家族はいかに経験するのか

研究課題名（英文）How families experience the 'recovery story' of alcoholics.

研究代表者

石井 宏祐 (ISHII, Kosuke)

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：30441950

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：アルコール依存症は当事者本人の健康や生活だけでなく家族にも悪影響を及ぼす。しかし実際にはその緊急性から当事者本人の支援に追われ、家族支援も「当事者の支援者としての家族」への支援であって、家族のつらさや苦悩や葛藤そのものへの支援は行き届いてこなかった。そこで、回復を続ける当事者の「回復の物語」と、困難な暮らしを続けてきた「家族の物語」を対比的に分析することによって、家族の求める支援を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自らを無理にコントロールしようとして陥る嗜癪者に対し、支援者が嗜癪者を無理にコントロールしようとする嗜癪的支援を行うことによる深刻な悪循環について、インタビュー調査を通して明らかにした。このような悪循環の背景には、嗜癪的な社会といわれる現代社会そのものの課題がある。一方、嗜癪からの回復には、回復の語りが役に立ち、さらにそれを聞く家族の語りとの相互作用によっても回復が促されることも研究を通して明らかになった。しかし家族の語りは嗜癪者のためにあるのではなく、家族自身の回復にも欠かせないものであった。このような視点は、嗜癪臨床に新たな一石を投じるものであるといえよう。

研究成果の概要（英文）：Alcoholism has a negative impact not only on the health and life of the person concerned, but also on the family. However, in reality, due to the urgency of the situation, support for the person has been sought, and support for the family has only been provided to 'the family as supporters of the person', without support for the pain, suffering and struggles of the family itself. We therefore explored the support sought by the family through a contrastive analysis of the 'recovery story' of the person who continues to recover and the 'family story' of the person who continues to live a difficult life.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アディクション 嗜癪臨床 支配的ではない支援

## 1. 研究開始当初の背景

アルコール依存症とは、アルコールを繰り返し多量に摂取した結果、アルコールに対し依存を形成し、精神的および身体的機能が持続的あるいは慢性的に障害されている状態のことである。このアルコール依存症からの回復には物語ることが欠かせない。そのため、アルコール依存症者が酒を断つまでの日々や断ち続ける日々を物語として他者に語ることが、回復への王道とされてきた。しかしアルコール依存症は否認の病と言われており、当事者が自身の問題を自覚することは難しく、そもそも回復への道を進むのは決して容易ではない。そのため当事者の家族は、つらい日々を永きにわたり強いられることが少なくない。

WHO は 2010 年、アルコールの有害使用に起因する罹病率や死亡率、ならびにその結果生じる社会的影響を大幅に低減し、個人、家族、社会の健康や社会的結果を改善することを目指し、「アルコールの有害な使用を低減するための世界戦略」を示している。しかしアルコールの有害な使用による死者は、毎年世界で 300 万人に上り、およそ 2 億 8300 万人がアルコール健康障害で苦しんでいるといわれている。

我が国の総合的な健康政策として 2000 年に策定された「健康日本 21」は、2013 年に全面改正され、現在第二次が適用されている。「健康日本 21」において、アルコール関連問題は「栄養・食生活」「たばこ」「糖尿病」「がん」などと並ぶ 9 分野の課題の 1 つに数えられ、国レベルでの対策がとられてきた。しかしながら第一次の 13 年間では、国が目指す目標は達成されず、アルコール関連問題の改善の難しさが改めて確認された。我が国にとって今後もアルコール関連問題への取り組みは喫緊の課題であるといえる。

我が国では、アルコール健康障害が本人の健康の問題であるのみならず、その家族への深刻な影響や重大な社会問題を生じさせる危険性が高いことに鑑み、アルコール健康障害対策基本法が 2014 年に施行された。ここでも、また WHO による「アルコールの有害な使用を低減するための世界戦略」でも、当事者本人だけでなく家族支援が目的に含まれている。しかし、実際には当事者本人の支援に焦点が絞られている。

確かに CRAFT をはじめ、アルコール依存症者の家族のための優れた回復支援プログラムも開発されてきた。しかしこのようなプログラムは、当事者本人の支援を家族が担うためのプログラムといえ、あくまでも支援者としての家族を支えるものである。家族のつらさや苦悩や葛藤そのものへの直接的な支援プログラムではないのである。

アルコール依存症は当事者本人の健康や生活だけでなく家族にも悪影響を及ぼし、家庭内暴力をはじめ、飲酒による家庭内の言い争い、経済的困窮、仕事上のトラブルなどを経て、家庭崩壊につながる恐れがある。そのような極めて不安定な状況の中、家族の暮らしは続いていく。家族に対する直接的な支援への取り組みが急務であるといえる。しかしながら、これまで当事者本人の支援や、アルコール関連問題の社会への啓発などに追われ、どうしても家族にまで支援が行き届いてはこなかった。そのため、家族がどの時期にどのような支援を求めているのかについての知見も不十分である。アルコール依存症の当事者を支える支援者として家族をみなすだけでなく、困難な暮らしを続けていく家族そのものの支援のニーズを明らかにしていくことが必要なのではないだろうか。

## 2. 研究の目的

本研究では、アルコール依存症からの回復を続ける当事者の家族が、当事者の「回復の物語」をいかに経験しているのかについての質的研究を行った。これまで、その緊急性から当事者本人の研究が主流であり、家族に焦点を当てた研究であっても「当事者の支援者としての家族」の研究であった。一方、本研究では当事者の「回復の物語」について、家族が支援者としてではなく、困難な暮らしを続けてきたその人そのものとしてどのように語るのかに着目した。石井ら(2016)では、研究代表者と研究分担者(岡田洋一、松本宏明)は科研費(26380978)の助成を受け、アルコール依存症者の「回復の物語」の分析を行った。また、石井ら(2015)では、研究代表者と研究分担者(石井佳世)は鹿児島市の助成を受け、アルコール依存症当事者からの DV サバイバーの語りを分析した。これらの結果から、アルコール依存症当事者の家族は、当事者が「回復プロセスに入る前」「回復プロセスの初期」「回復プロセスが定着する時期」「回復プロセスが維持されていく時期」それぞれで苦悩を経験しており、当事者理解だけでは家族支援には不十分なことが示唆された。例えば、回復プロセスが軌道に乗った当事者が安定していく影で、家族はその「回復の物語」の語られ方に不安や不満をおぼえるといった乖離がみられた。

そこで、経験の質的分析によって、家族はどのような思いを抱え、どのような支援を必要としているかを明らかにすることが、本研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

主な研究方法は、インタビュー調査による質的研究である。特に現象学的心理学的方法を用いて分析を行った。Giorgiの方法とよばれる分析方法を採用した。

本研究課題において、特に柱となる2本の論文について、とりあげる。

回復を続ける当事者の「回復の物語」と困難な暮らしを続けてきた「家族の物語」の対比的な研究においては、アルコール嗜癖者と妻の夫婦を対象に分析を行った。

嗜癖的な支援を明らかにする研究では、臨床心理士が経験する自らの気がかりな応答について分析を行った。

### 4. 研究成果

ここでも本研究の柱となる2本の論文を中心に記述する。

回復を続ける当事者の「回復の物語」と困難な暮らしを続けてきた「家族の物語」の対比

研究テーマを「当事者によるアルコール依存症からの回復の物語を配偶者はいかに経験するのか」として行った。

配偶者にとって、当事者の語りは複雑なものである。回復の語りを当事者が語ることは一見肯定的な出来事であるが、配偶者にとっては過去の苦労を思い出す経験でもあり、苦しさを伴うものである。しかし時間を経過するうちに、当事者の語りと家族の語りは互いを補い、それぞれ独自の語りとはいえないものになっていく。「当事者の回復の物語」と「家族の物語」を対比的に検討する試みによって、むしろこの二項対立自体が成立しえない結果となった。問題や症状の単位を個とせずシステムとする家族療法の考え方は、回復の単位の再考をも促す可能性が示唆された。

また、この研究への示唆として、当事者や家族は、支援者の嗜癖的な支援によって傷つき、回復にとって否定的な影響を受けた経験を有していることも明らかになった。

嗜癖的な支援を明らかにする研究

研究テーマを「自らの気がかりな応答をめぐる臨床心理士の嗜癖的な経験」として行った。

結果として、気がかりな応答はクライアントに対する無理なコントロールの行使になるおそれがあることが明らかになった。一方で、気がかりな応答に慎重になりすぎることまたクライアントに不利益をもたらすコントロールになりうる。気がかりな応答に自覚的であろうとする態度が求められることが示唆された。

これらの研究を通して、嗜癖臨床における当事者と家族、さらには支援者の間の、無理なコントロールを巡る悪循環の機序が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 武藤垂佐子・石井宏祐	4. 巻 41
2. 論文標題 幼稚園で安心感を持って過ごすようになるまでに時間を要した幼児の「遊びの探究」に向けての支援	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 佐賀大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 増田 彰則・山下 協子・松本 宏明・平川 忠敏・胸元 孝夫	4. 巻 62 (4)
2. 論文標題 子どものインターネットゲーム障害の背景因子と外来治療経過	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心身医学	6. 最初と最後の頁 326-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤 垂佐子, 石井 宏祐	4. 巻 40
2. 論文標題 自分らしく遊ぶようになるまでに段階をふんだ幼児	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松本宏明	4. 巻 11
2. 論文標題 ペアレント・トレーニングとブリーフセラピーの視点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 志学館大学心理臨床研究紀要	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井宏祐・石井佳世	4. 巻 9
2. 論文標題 DVサバイバーのコントロール感に対するトラウマの大きさの影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 137-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井宏祐・武藤亜佐子	4. 巻 39
2. 論文標題 人間関係の発達に伴い食行動のこだわりが波がみられた幼児	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 131-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井佳世・石井宏祐	4. 巻 9
2. 論文標題 DV加害者イメージ及び被害者イメージの常識的構造 - 大学生を対象に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 149-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本宏明	4. 巻 42
2. 論文標題 心理職における知識のメタモデルとしての情動的構成主義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 志学館大学人間関係学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本宏明・岡田洋一・石井宏祐・増田彰則
2. 発表標題 心療内科におけるネット・ゲーム依存家族会8年目の現在地
3. 学会等名 第35回九州アルコール関連問題学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 石井宏祐・石井佳世
2. 発表標題 当事者によるアルコール依存症からの回復の物語を配偶者はいかに経験するのか
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永石 尋幹・湯田 翔悟・松本 宏明・大竹山 なつき・石井 宏祐
2. 発表標題 悪循環と時間
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第14回学術会議
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 自らの気がかりな応答をめぐる臨床心理士の嗜癖的な経験
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 アディクション臨床におけるブリーフセラピーを愛着理論から考える
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第13回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本宏明
2. 発表標題 ベイトソンとMRIメンバー「ドン・ジャクソン記念講演」から紐解くベイトソン・プロジェクト
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第13回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 回復を続けるアルコール嗜癖者のコントロールにまつわる経験
3. 学会等名 第42回日本アルコール関連問題学会（誌上大会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井佳世・石井宏祐・岡田明日香
2. 発表標題 DV支援者の常識的支援観にまつわる心理構造
3. 学会等名 第42回日本アルコール関連問題学会（誌上大会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 変化をめぐる嘆きに注意を向ける（自主シンポジウム「変化志向に悪循環のおそれがあるときの家族療法」）
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本宏明
2. 発表標題 ペアレント・トレーニングでの肯定的変化の裏にあるもの（自主シンポジウム「変化志向に悪循環のおそれがあるときの家族療法」）
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井宏祐・石井佳世・丸田なつき
2. 発表標題 DVサバイバーのコントロールにまつわる経験
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井佳世・石井宏祐
2. 発表標題 DV加害者イメージ及び被害者イメージの常識的構造
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 石井宏祐
2. 発表標題 ベイトソンのアディクション観・自助グループ観はブリーフセラピーにどう役立つか
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井佳世
2. 発表標題 子育て神話とブリーフセラピー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本宏明
2. 発表標題 ペアレント・トレーニングでの肯定的変化の裏にあるもの
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井宏祐・石井佳世
2. 発表標題 アディクション支援からみた家族療法
3. 学会等名 日本家族心理学会第36回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生田倫子・石井宏祐
2. 発表標題 ブリーフ・コンサルテーション
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第11回学術会議仙台大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 長谷川 啓三、花田 里欧子、佐藤 宏平	4. 発行年 2024年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談：小学校編 第3版	

1. 著者名 長谷川 啓三、佐藤 宏平、花田 里欧子（編）石井宏祐（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 中学校・高等学校編 [第3版]	

1. 著者名 長谷川啓三、花田里欧子、佐藤宏平（編）石井宏祐（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 小学校編 [改訂版]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡田 洋一  (OKADA Yoichi)  (20369185)	九州ルーテル学院大学・人文学部・教授    (37406)	
研究分担者	石井 佳世  (ISHII Kayo)  (00551128)	熊本県立大学・共通教育センター・教授    (27401)	
研究分担者	松本 宏明  (MATSUMOTO Hiroaki)  (90625518)	志學館大学・人間関係学部・准教授    (37703)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関